

# 「緊迫感と、被災者の実感を体得」

## —みどり病院・トリアージ訓練に参加して—

相次ぐ地震、水害に不安が募る毎日です。9月27日に実施された訓練に災害時の患者として参加させていただきました。

事前説明会で、南海トラフ巨大地震時、病院周辺での震度6弱～強と被害想定、死亡18、重症31、軽傷245人に、これは大変！被害者なりの傷や骨折の化粧？をしていただき、私は重傷で



車いすから、看護師に抱き起こされベッドへ・・・あとは医師が治療と対応、入院・搬走とトランシーバーでのやりとりに、緊迫感が漂う院内、貴重な体験でした。

本当の災害時に、みどり病院が地域の被災者に寄り添い命を守ってくれる、と期待できました。

(渡邊 優)



# 私は争うことが大っ嫌いです～<sup>ど だ だ は る</sup> 百々堯春さん

関支部



百々さんと驚見医師(こがねだ平和のゆうべにて)

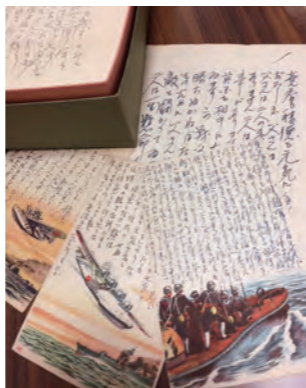
今年の「こがねだ平和のゆうべ」の語り部、百々さん(昭和6年生まれ・当時名古屋在住)の戦争体験を2回に分けて書き残したいと思います。

百々さんが小学4年の時に僧侶ということで兵役免除だったお父さんがついに出征されました。お父さんへの手紙の宛先は記号だったので何処から届くかは分かりませんでした。終戦の半年ほど前に訪ね来られた人にマーシャル諸島のケゼリン島で一緒だったと教えてもらいました。

戦後、お父さんも帰ってくると信じて待ちわびていた家族に届いたものは「昭和19年2月6日にマーシャル諸島にて戦死」という紙切れ1枚の通知です。それは既に亡くなって三年以上も経っていた昭和22年5月のことでした。(1944.1.30にアメリカ軍が侵攻したケゼリンの戦いで日本軍は全滅)ショックを受けた百々さんは学校へ行けなくなってしまいました。名古屋駅での別れが最後になるとは夢にも思わなかった、その情景を思い浮かべると今も胸がつかまるそうです。戦火から守り抜かれ大切にされたお父さんからの手紙の数々を見せてくださいました。

小学校卒業後は旧制中川中学に入学しましたが授業は夏迄。9月からは学徒勤労動員で笠寺の岡本工業で働くことになりました。仕事は軍用機の車輪の足の部分の旋盤ですがほんの少しの指導ですぐに本番です。13-14才の少年には大変難しい作業でしたが、お釈迦にすると怒鳴られたり叩かれたりしたものです。身体の弱くて兵役に付けなかった粕谷さんという優しい人がよくかばってくれたそうです。

次号につづく(聞き手 佐野 典子)



お父さんからの手紙

### 名古屋空襲概要

1944年12月13日以降、名古屋は軍需工業地帯が集中していたため63回の空襲を受けて死者8630名、負傷者11164名、罹災者52万3千名の被害を出した。実際には死者は1万名以上にのぼるとみられる。

# 楽しかった!14日間の梅子の家夏休み子ども食堂

延べ参加数子ども362名(1日平均25名)、大人241名。酷暑の夏、子どもたちは外へ出られず、ほとんど室内でしたが事故なく終わる事ができました。

ゲーム、トランプ、鬼ごっこ、折り紙、ままごと等・・・

大人を巻き込んで、元気な子どもたちの声が響きました。

「ままごと」は日常の小さなコミュニティを作り出しました。〇〇屋さん(弁当屋、雑貨屋、アイスクリーム屋・・・)に銀行、アルバイト募集、お店の広告、仕入れ等色々と分担し、まるで商店街はおおにぎわい。大人はお客さんです。

子どもが主体となり、大人が参加する光景は、子どもの居場所のあり方発見でした。(齊藤 恵津子)



# 「落語を聴いたよ」

華陽支部



華陽支部では、月1度のサロン羅衣布(らいふ)開催日。毎回20名ほどの会員が集まり、午後の数時間を皆でにぎやかに過ごしています。

今回は会員のTさんの落語「禁酒番屋」を聴きました。彼はとても芸達者で、以前はどじょうすくいの踊りを披露してくれたこともあります。当日は大座布団も用意して、それなりに雰囲気づくりの準備したところ、あいにく足の故障で正座ができないという事で、写真風景は会議風?!それでも話は面白く最後のオチにはみんなが大笑い!さすが日頃の練習成果というものでしょう。

毎回、世話人数名で企画を立て準備していますが、「みんなと楽しく過ごせる時間」のモットーさえあれば、持ち込みゲスト企画大歓迎!みなさんに広く募集します。(堀田 紀治)

# 元気にスタートしました! 芥見地域に、野村・和高支部が発足

芥見支部

7月28日(土)に岐阜健康友の会「野村・和高支部」創立総会が参加者22名で開催されました。総会では、岐阜勤医協土井専務理事から、みどり病院について、岐阜健康友の会会長渡邊優氏から自らの命と健康を守る「友の会」についてのお話を伺いました。

この地域は、高齢化率33%で「一人暮らしになったら、病気になるのが一番心配・人の輪が大切」など「独居高齢者」の声が増えています。

「健康班会」の開催「サークル」づくりの活動が共感を呼んできました。支部は総会で決めた方針にそって、役員さんがサークル仲間呼びかけ、会員増やしや、「いつでも元気」取り扱い所も開設し購読者も増えています。(戸崎 光明)

